

皇學館史學

第 38 号

論文

- 文永博多湾岸合戦考 多田 實道 (1)
蓮如と白山 一文明六年一向一揆を中心に― 新谷 竜希 (15)

研究ノート

- 『鎌倉大日記』正嘉元年条について 田宮 佑至 (35)

講演

- 朝鮮王朝と薬用植物 辻 大和 (55)

史料紹介

- 「日露戦争画帖」 長谷川 怜 (73)
― 一個人が描いた同時代の日露戦争史―
香川志保子 欧州巡行日記 (二) 梅田 優歩 (107)
― 明治二十年四月一日より同五月二十二日―

〈彙報〉

- 皇學館大學史學會令和四年度活動報告 (127)
行事 (含役員会・委員一覧)・研究部会
令和四年度修士論文及び卒業論文題目 (128)
令和四年度教員並に講義 (132)

令和5年3月

皇學館大學史學會

「日露戦争画帖」——個人が描いた同時代の日露戦争史——

長谷川 怜

個人が所蔵する史資料を研究資源とするためにはいかなる方法が適切であるか、またその公開方法について、近年様々な議論がなされている。東アジア近代史学会の二〇二一年度大会では、《歴史資料セッション》「保存公開資料と歴史研究者の役割」が開催され、資料公開施設に収蔵された歴史資料が必ずしも歴史的遺産として残されてきたものばかりではなく、購入や寄贈、偶然的発見によるものであることを鑑み、資料と歴史研究者がいかに向き合うべきかが議論された。報告者のうち島田大輔氏による「売られ散逸した私文書の来歴とその行方」では、収蔵される資料がある一方で分散してしまい「残されなかった資料」が存在することを紹介しつつ、資料保全について提言が行われた（『東アジア近代史』二六号、令和四年掲載）。また、二〇二二年度大会のセッションでは「私蔵資料と歴史研究——「発見」から保存・活用へ」を開催し、個人や研究者が私蔵する資料に光を当てそれらを研究資源として活用するためにいかなる努力が必要であるかを議論し、私蔵資料を掘り起こし公開につなげることも、現代の歴史学界の役割であると提言した。

本稿で紹介する「日露戦争画帖」（以下、本資料）【画像1】は、日露戦争の全期間を絵と文章によってまとめたもので、平成二六年（二〇一四）に京都の古書店から購入し、筆者（長谷川怜）が所蔵している。古書店で販売される時点で、来歴や描かれた地域（作者の居住地）などの諸情報をたどることはほとんど不可能になっている。後述する通り、日露戦争の全期間にわたり記録された稀有な資料であり、筆者はこれまでに部分的に学会報告や講義で活用を図ってきたが、公開することで研究資源として活用できると判断し、全文を翻刻した。ただし紙幅の関係から一二〇枚に及ぶ絵の全てを掲載することは不可能であり、特に重要であると考えた絵（日露戦争における重大な戦闘や出来事を示す部分）を収録した。なお、翻刻に際しては資料に対する筆者の分析を部分的に加えた。

本資料の制作期間は開戦から終戦後の凱旋まで（明治三七年（一九〇四）二月～明治三八年（一九〇五）一月頃）であるが、部分的に翌年以降に追記された箇所が存在する。おおよそB4判に相当するサイズの和紙に墨で文字と絵が描かれ、一部水彩で彩色されている。厚紙の表紙をつけて和綴じされた上中下の全三冊構成である。作者については、各表紙及び下巻末に「精策」という名前のみが記され、本名や職業、年齢などは不明である。「精策」は、下巻末において本資料筆記の動機を以下のように書き記しており、徴兵または出征する年齢ではなかったことが分かる。

日露の開戦より兵士わ銃砲剣刀に手を、我れは筆を手に占領く万歳の声に勇みつ運びし拙なき、ぬたくり書き、基より画として見るねぶちなし。只戦争当時の記念にも成れば幸甚なり。

明治廿八年 軍隊の凱旋を迎

ゑて



画像1：「日露戦争画帖」
上中下巻（明治37年～38年）

「日露戦争画帖」に描かれた絵は、作者が実見した国内の光景も含まれていると考えられるが、多くはメディアの報道と、当時発行・印刷されていた絵葉書や版画などの視覚メディアによって流布されたイメージの再生産である。各戦闘の様子、とりわけ水師營の会見や奉天入城、日本海海戦など日本の勝利を示す劇的な場面には、同時代に流布していた視覚メディアからのイメージ転用を見ることが¹⁾できる。

作者の「精策」は、戦争の全期間にわたってメディア報道等を収集し、取捨選択しながら断続的にこの画帖を制作していったのである。必ずしも全編が編年になっているわけではなく、「遼陽攻撃」、「沙河方面」、「旅順包囲軍」などの章に分けられており、各章の冒頭にはその戦闘に関する概要が示されている。その都度描いたものを最終的に取りまとめて戦闘などのテーマで章として編集し、綴って完成させたと考えられる。

明治三十七年三月二十七日に行われた第二回旅順港閉塞作戦のページには、広瀬中佐の銅像が東京の万世橋駅前に建設されたこと（明治四三年）が附記されており、これ以外にも後年に追記した部分が存在する可能性がある。

本資料では、戦闘の様子だけでなく、地域から兵士が出征していく場面や、開戦に先立ちロシア領や満洲から引揚げる邦人の様子、また講和直後の日比谷焼き打ち事件など、戦時下の日本人や日本を取り巻く状況も題材とされている。当時、国内でどのような報道がなされ、またそれに対して「受け手」である市井の人々がいかに反応したのか、すなわち同時代の一般の人々が見た日露戦争のありようを知るための一事例として貴重である。

なお、本史料の存在については、この史料紹介に先立ち、令和五年一月一七日の『毎日新聞』朝刊で報道された（「日露戦時代 筆者不明の私史翻刻」）。

【凡例】

- ・ 本稿は、精策筆「日露戦争画帖」上巻・中巻・下巻（筆者所蔵）を翻刻したものである。
- ・ 日露戦争宣戦詔勅や部隊編成など、同時代の他史料で確認できるものは紙幅の関係上、翻刻を省略した。
- ・ 各翻刻の冒頭には、便宜上算用数字でページ数を示した。
- ・ 旧字体・異体字は原則として現用漢字に、変体仮名は平仮名に改めた。
- ・ 翻刻に際しては適宜句読点を補い、文中の明らかな誤りにはママを付した。
- ・ 史料記載の内容に関する解説や補足は翻刻の行間にその都度示した（ゴシック体）。
- ・ 各巻のページ数は、上巻・四〇ページ、中巻・四〇ページ、下巻・四二ページ。
- ・ 史料の法量は三四三mm×二五二mm、厚さは上巻・中巻が八mm、下巻が九mm。
- ・ 史料中には現在の観点からすると使用するにふさわしくない差別的用語が登場する場合があるが、歴史資料であることを鑑みそのまま掲載した。
- ・ 掲載画像はいずれも著者蔵。

「日露戦争画帖」上巻

- 〈1〉明治三十七年 日露戦争に就き詔勅謹写 〈省略〉
- 〈3〉日露戦争当時の各大臣 〈省略〉
- 〈4〉御製 ますらをに 旗を授けて 思ふかな 日の本の名を かゝやかすへく
御製 こけむせる 岩根の松の よろつよも うつきなき世は 神そもるらむ

いずれも明治三十七年に詠まれた御製であるが、一首目は「ますらをに 旗を授けて
いのるか^な」が正しく、史料中の記載は誤りである。

〔5〕 日露戦争に於ける我陸軍 総司令官 陸軍元帥 大山巖、総参謀長

陸軍大将 兒玉源太郎、参謀長 陸軍中将 福島安正 (以下略)

日露戦争当時の我軍艦表 聯合艦隊司令長官 海軍大将 東郷平八

郎、参謀長 海軍少将 加藤友三郎 (以下略)

〔12〕 日露戦争当時の陸軍の服装 (但戦争なかばよりかき色、則ち満洲の土
色の服を着せり) 【画像2】

〔13〕 明治三十七年二月六日 我聯合艦隊、佐世保を出発す。聯合艦隊司令
長官わ海軍中将東郷平八郎氏なり。 【画像3】

〔14〕 明治廿七年二月八日午後一時頃、我駆逐艦わ旅順口外に襲撃し敵露艦
レトウイザン号外二隻を爆破す。明治廿七年二月九日、旅順口外にて
我聯合艦隊と露国艦隊と大海戦をなし、我軍大勝利を得。

〔15〕 明治廿七年二月九日、海軍少将瓜生外吉のひきゆる艦隊をして韓国仁
川港内にある露艦コレツ、ワリヤークの二艦を攻撃し、先ずコレツ沈
没し、ワリヤーク自ら爆沈す。図中のボヲトわ各国が赤十字旗を立て
求^マ助^マに迎^マふ所なり。同日、陸兵を仁川港に上陸す。

〔16〕 明治廿七年二月上旬、露国宣戦を始むるや、露領シベリア及び満州地

「日露戦争画帖」―個人が描いた同時代の日露戦争史―(長谷川)



画像3：画帖における最初の場面は満洲方面へ向けて佐世保を出発する聯合艦隊



画像2：彩色された数枚のうちの1枚。戦争初期の黒い軍服を描いている。

方在留の日本人わ皆、本邦^マ引揚せしむ。【画像4】 【画像5】

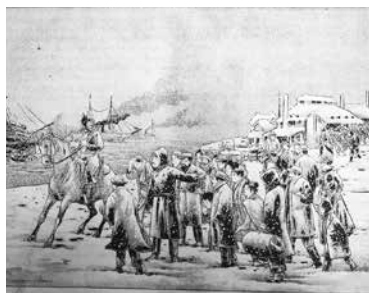
明治三十七年二月二十五日発行の『征露図会』第一号（東陽堂）には「旅順及哈爾濱の邦人引揚の図」が掲載されている。「日露戦争画帖」に描かれたものと完全に一致するものではないが、作者が『征露図会』または同時期に発行された雑誌等の挿絵を参照したことが推定される。

〈17〉動員令 召集に応じ、兵役に出発する在郷軍人を送る。附記 召集に応じ兵役に行く人わ皆、紅木綿の襷を掛
けたり。故に当時召集を俗に赤だすきと云へり。【画像6】

出征兵士を描いた絵は本人が実見した光景であろう。出征に際して赤襷を掛ける風習は恐らく日露戦争から始まったものである。日露戦争期の真下飛泉による唱歌（軍歌）「出征」には「昨日とどいた赤だすき、かけて勇んで行きます。行くは旅順か奉天か」という歌詞が登場する。ただし、注記として「所によっては動員令の時、赤襷はなき由なれば若しさる地方にては「昨日とどいた動員令、持



画像4：ロシア領からの邦人引き揚げの様子。当時の雑誌挿絵を参考にしたことうかがわれる。



画像5：『征露図会』第1編（東陽堂、明治37年2月25日）に掲載された「旅順及哈爾濱の邦人引揚の図」。海が描かれているところから恐らく旅順であろう。実見した様子ではなく想像図と思われる。



画像6：彩色された図の1枚。作者本人が実際に見た光景だろうか。

つて勇んで行きまする」なごに改められたし」と書かれており、全国に共通するものではなかったことが分かる。⁽³⁾

〔18〕今や出征なす各軍隊を停車場に祝送す。【画像7】

駅前の広場には出征兵士たちのほか、彼らを送るため旗や幟を掲げた人々や楽隊の演奏、炊き出しの様子が描かれている。機関車には客車の他に砲が積まれた貨車が連結されている。右端に描かれる駅舎は石造りのように見えるが場所の特定はできない。制作者が実見た様子であろうか。明治三十七年二月二十五日発行の『征露図会』第一号（東陽堂）には「兵員召集に応じて青山なる近衛第四聯隊も馳付るの図」がある。描かれた兵士たちはいずれも襷を付けていないが、見送りの人々が集う様子などは画帖の絵と類似している。

〔19〕明治廿七年二月廿八日、韓国平城七星門外にて露国偵察隊（コサツク騎兵）を撃退す。此れ陸戦の始めなり。是戦にて騎兵田所清熊氏、最始の陸軍戦死者たり。

二月十一日午後一時頃、青森県昼の沖にて汽船奈古浦丸、露国ウラジラ艦隊の為に撃沈さる。但乗組員全部救助さる。

〔20〕第一回旅順口閉塞 廿七年二月廿四日 明治廿七年二月八日以来、旅順口港の敵艦わ我数度の攻撃に辟易し、港内深くかくれて出ず。さりとて此の儘に成シ置けば我軍艦のすきを見ていつ攻撃に出るやはかられず、故にぞつたい出港の出来ぬ様う、港口を閉塞成さんとて、仁川丸、武陽丸、武州丸、報国丸、天津丸の五汽船に石等の物をつみ、司令官海軍大佐有馬良橋、海軍少佐広瀬武夫以下七十七名の決死隊をして廿七年二月



画像7：細かく描かれており、本図も作者の見た光景だと思われる。

廿四日深夜、敵軍港に進入し自ら爆沈せり。扱て敵も其れと気づき各砲台よりサーチライトヲ照し、各砲台より大砲を猛射せしかば、我行動意の如く成らず閉塞の目的をはたし得ざりし成り。此決死隊の内、機関兵梅原健造一人戦死す。

使用船名 天津丸（四、三三五噸）指揮官中佐有馬良橋、報国丸（二、四〇〇噸）指揮官少佐広瀬武夫、仁川丸（二、八〇〇噸）指揮官大尉齋藤七五郎、武陽丸（一、二〇〇噸）指揮官大尉正木義太、武州丸（一、六九〇噸）同中尉鳥崎保三

〔21〕明治廿七年三月十日午前四時頃、我が駆逐艦わ旅順口沖にて敵駆逐艦と舷々相摩すまでの大激戦をなしたり。其時、我一水兵長田某、敵艦に飛乗り敵の艦長を切り、海中へけり飛ばしたりと云ふ。

〔22〕第二回旅順港口閉塞 明治廿七年三月廿七日「第一回閉塞」意の如く成らざりし故、ここに司令官有馬良橋大佐をして米山丸、弥彦丸、千代丸、福井丸の四汽船をして水雷艇、駆逐艦護衛の元に第二回敵軍港口閉塞を廿七日深夜行ひしが、敵のサーチライト及び大砲の猛射にて少し閉塞の実を得ざりしわ遺憾なり。此時、福井丸の乗組海軍少佐広瀬武夫戦死の後ち中佐に昇任が、其乗船が爆沈成シ乗組員が皆ボヲト中に乗りしが只一人杉野兵曹長の見えざればまさに沈まんとする福井丸にボヲトより飛乗り杉野くと呼び、三度船中をさがし廻りたれど杉野が見えず。かくて海水膝を没すれど平常部下を愛する念強よく、船を去らんとせざれば他の兵わ少佐の御身あやうし早やくくとせき立つれば、なむ無くあと見返りボヲトに乗り、少し漕し処にて砲弾飛乗り少佐の身わ二錢銅貨大の肉片を艇中に残し壮烈なる戦死をなしたり。

後年海軍軍神広瀬中佐とて東京万世橋駅前に中佐と杉野兵曹長の銅像建てり。使用船指揮官わ鳥崎保三をのぞく第一回と同じ。【画像8】【画像9】

〔23〕明治廿七年三月廿八日、我近衛騎兵、敵を撃退して韓国定州城を占領す。

〔24〕同年四月十三日、敵旗艦ペトロウイツク(5)わ旅順口外にて我ちんせ(沈没)つ水雷にかり爆沈し、提督マカロフ中将以下七百余名死す。マカロフ中将を世界海軍中、有名の戦術家たりし人なり。

〔25〕明治廿七年四月廿五日夜、露国ウラジヲ艦隊わ韓国新浦沖にて我御用船金州丸(三千八百噸)を撃沈す。同船にわ大阪第四師団三十七聯隊第九中隊の将卒が元山津より乗込しが、途中月夜露艦三隻の包圍攻撃を受、如何とも成すを得ず船の没すると共に無念の最後をとぐ。

〔26〕明治廿七年四月廿六日以来、我軍前進し鴨綠江中の九里島を占領し四月廿日、工兵隊わ鴨綠江に架橋し全軍渡河す。

〔27〕明治廿七年五月一日、我軍九連城を攻撃し之を占領す。敵の軍団長負傷し、戦利品砲三十門、他多数。捕虜一千二十余名。

〔28〕明治廿七年五月三日夜、旅順港口 第三回閉塞を行ふ。用ゆる汽船十二隻。当日わ風浪高く中にも佐倉丸わ港口防伐を破りて猛進、沈没す。

使用船十二隻 新発田丸(四、二〇〇噸) 指揮官中佐林三子雄、小倉丸(三、三四〇噸) 同少佐福田昌雄、朝顔丸(三、三五〇噸) 同大尉

「日露戦争画帖」—個人が描いた同時代の日露戦争史—(長谷川)



画像9：東京市神田区の万世橋駅前に建てられた広瀬中佐と杉野兵曹長の銅像。敗戦後に撤去され現存しない。



画像8：中央の船上に広瀬中佐が描かれている。

向菊太郎、三河丸（二、三三〇噸）同大尉匝蹉胤次、遠江丸（二、三八〇噸）同少佐本田親民、釜山丸（二、九二〇噸）同大尉大角岑生、江戸丸（一、八五〇噸）同大尉高柳直夫、長門丸（二、一二〇噸）指揮官少佐田中銑郎、以下此のうらに記す。小樽丸（三、〇〇噸）指揮官大尉野村勉、佐倉丸（三、七〇〇噸）同大尉白石葭江（戦死の後少佐に進級す）、相模丸（二、一八〇噸）同大尉湯淺竹次郎、愛国丸（一、六五〇噸）同大尉犬塚太郎

第三回閉塞決死の勇士の内、白石少佐以下、二十一人わ黄金山砲台に突進し名譽の戦死をとぐ。

〔29〕明治廿七年五月五日、我第二軍遼東半島塩大澳に上陸するに先ち、海軍決死陸戦隊わ勇猛揚陸し附近を占領す。間先きの士官わ野元大佐なり。

〔30〕明治廿七年五月五日、我第二軍わ遼東半島塩大澳に上陸す。海岸遠く浅瀬なれば海中を歩行し困難を極め上陸す。

〔31〕明治廿七年五月廿五日、夜より第二軍わ雷雨を冒し金州城を攻撃し廿六日早朝、之れを占領す。右図わ我工兵決死隊十二名城門破壊に向ふ所なり。

〔32〕明治廿七年五月廿六日、我軍大拳金洲南山を占領す。

〔33〕常陸丸の最後 時わ明治廿七年六月十五日、元海灘沖之島附近にて我御用船常陸丸（六、一七五噸）、露艦（浦塩艦隊）三隻に包囲され乗組員兵士共総員八百余名わ無念の涙、船もろ共、元海灘深く撃沈さる。同時に佐渡丸（六、二二六噸）、和泉丸（二千噸）共に砲撃を受けしが幸無事退却せり。

〔34〕常陸丸ぶ乗組し近衛後備歩兵第一聯隊本部第二大隊及び第十師団の架橋縦列の兵士合計八百余名わ満州出征の徒上露艦に砲撃され元より武備無き船成れば如何とも成すを得ず。乗組の兵士皆無念の涙をふるい聯隊長須知

源次郎中佐わ悲痛の決心を以て聯隊旗及び重用書類を焼き陛下の万歳を唱^{ウタ}ゑて死す。

〔35〕明治廿七年六月十五日、激戦以て我軍得利寺を占領す。之の戦にて我死傷一千人、敵死傷一万余、捕虜三百人余。

〔36〕明治廿七年六月廿三日、我軍わ大石橋街道仙家塔に宿營せる敵騎兵一中隊を奇襲し之れを潰乱せしめ、三河道北方高地を占領す。

〔37〕明治廿七年六月廿七日、我大弧山上陸軍（第三軍の内）わ分水嶺を激戦し占領す。凶中の木ぐいわ鉄條網なり。

文中にわざわざ「木ぐいわ鉄條網なり」と説明を補っているのは当時、鉄條網がまだ一般によく知られる存在ではなかったことを示している。明治二〇年代から陣地防御の設備として鉄條網が用いられていたが、⁶⁾ 実戦において兵士たちが鉄條網を乗り越えるという経験をしたのは恐らく日露戦争が初めてであつただろう。新聞記事に鉄條網の用語が現れるのは明治三十七年であり、いずれも旅順要塞の守備について報じた記事である。同年三月二日の『東京朝日新聞』朝刊の記事「旅順方面の敵情」には「鉄條網（鉄條の網を張るなり）」との注記があり、六月五日の『読売新聞』朝刊に掲載された記事「旅順背面の柵」では「各柵の間隙に八太き鉄線を菱形に結付け、又此鉄線に尖りたる無数の小鉄線を巻付け出入を禁せりと」のように鉄條網の形状について解説されている。

〔38〕明治廿七年六月廿一日、熊岳城を占領す。同年六月廿七日、摩天嶺を占領す。同年七月五日、蓋平占領す。此の凶わ其時の実戦見取図なり。同年七月廿五日、激戦の上、大石橋を占領す。敵の歩兵四個師団に砲百二十門成り。七月卅一日、我軍様子嶺を占領す。

〔39〕明治廿七年七月卅一日、我軍柵木城を占領す。此戦にて敵野砲六門を鹵獲し若干名の敵兵を捕虜す。此日の氣候日中華氏百二十度成り。明治廿七年八月三日、我軍手莊城を占領す。同日、我軍海城を占領す。

〔40〕明治廿七年八月十四日、戦始より我奈古浦丸及び金洲丸、又常陸丸等の武備無き汽船を撃沈し、多くの我兵を死なせし最もにくむ可き敵の浦塩艦隊も遂に悪運尽きしか、我第二艦隊（司令官上村彦之丞中将）に朝鮮蔚山沖にて包囲され、悪戦苦闘の内に敵艦（リュイツク）わ撃沈され（ロシヤ）、（クロンボイ）わ大損害を受けよをやく浦塩を逃げ込、再度出港出来ぬ様に成れり。

「日露戦争画帖」中巻

〔1〕御製 ねざめにも おもひ出るかな軍人 向ひし方の たよりいかにと

いくさ人 いかなる野辺に 明すらむ 蚊の声しけく なるこの夜を

御製 つはもの、心と、ものに のる駒も つかるゝ知らて いや進むらむ

〔2〕遼陽攻撃 遼陽わ満洲の一大都市にして敵の首力を集中し、防御最も頑強に成し、東わ様子山頂より南わ鞍山站に至る間に十二個師団の兵を配い置し、加うるに鉄條網、鹿柴、狼奔等、十重に引廻し加うるに重砲、野砲等百數十門を用意し猛烈に我れに抵抗す。我軍わ明治廿七年八月廿六日、我第二軍及び野津軍の鞍山站を占領し、八月廿八にち、第一軍わ大子河にそい英辱堡より双廟子に宣る線を占領せしより遼陽に向て総攻撃の始まりとし、幾多の激戦を重ね遂に明治廿七年九月四日占領す。

鉄條網わ木の杭を打ち込み其れにいばらのある鉄線を引き廻す。狼奔わ地に穴を掘り進軍の妨害と兵の落ち込む為めになす。

鹿柴（木を切り枝付にてならべ置く）

〔3〕明治廿七年九月二日、遼陽の敵大軍が全力を集中し最も防備を厳に成したる首山堡も遂に我軍の猛烈なる攻撃

により之れを占領す。此の攻撃に我関谷聯隊わ凡そ全滅し、同隊橋中佐（当時少佐）わそを烈なる戦死を遂げ、海軍の広瀬中佐と共に軍神と後世まで其名譽を残せり。【画像10】

〔4〕遼陽の敵大軍 逃走して大小河左岸に圧撃され多数の戦死者を出す。図上の火わ敵自ら軍橋を焼きしなり。

〔5〕明治廿七年九月四日、我軍遼陽を全占領す。

〔6〕明治廿七年九月十一日、我軍烟台炭山を占領す。

〔7〕沙河大会戦記 日露の戦わ最初より数十度を重ね連戦連勝をつゞけ来り、今や満州の都会の一たる敵の死守せし遼陽も遂に

我軍の占領する処となり、敵師クロバトキン大いに面目玉をつぶし居る折柄、露帝より旅順援助の勅命を受け、クロバトキン及び其部下共一つに勅命をまつとをし、又今迄の敗戦を一挙に取もどさんと必死の勇を起し我軍に向けて始めて攻勢の運動を取り来れり。之れ明治廿七年十月二日成り。則ち今迄の戦わ敵の防御工事をなし其れを守備成し居る所を我軍が攻撃を成しつゝ、有りしが、今回わ敵も攻撃なれば元より我軍も攻撃、つまり平地の出合いくさにて、真の実力を確証する戦なり。此所、南満州の平野沙河を挟み猛烈なる激戦と奮戦を行われしが、我れの猛勇にわ如何なる敵の攻撃も其功無く、敵わ戦場に屍体一万三千三百三十余を遺棄し、沙河を退却し渾河右岸に潰走したり。

〔8〕明治廿七年十月二日、遼陽北方に退却せし敵軍が全部攻勢運動を起し、又我軍大挙前進を開始し、今や沙河大会戦となれり。之れ其一図。



画像10：中央で軍刀を振り上げている人物が橋中佐であろう。海の広瀬、陸の橋は軍神として戦意高揚のため様々な媒体で語られた。

〔9〕沙河大会戰之六圖 明治廿七年十月九日、敵の大部隊、本溪湖に向て進撃し、我軍之れに向て攻撃す。沙河大会戰に於いて彼我の死傷者、敵の死傷者凡そ六万人以上。我軍死傷二万人。又敵の捕虜五百余名。分取品、砲四十五門、彈藥車三十七輛有り。

〔10〕沙河大会戰之三圖 明治廿七年十月十三日、敵師クロバトキンが死守せよと命令の元に露本國のアレキサンダー名誉聯隊が守備せし三塊石山を我第十師團の勇猛なる攻撃、突撃に（丸井少將⁹負傷）て之れを占領す。

〔11〕沙河大会戰之四圖 我左翼軍、十月十三日激戦の後ち、浪子街を占領す。我軍の猛烈なる攻撃に敵乱して退却し、我軍之れを追撃して十月十四日、燒達甸北方高地、孤家子、万家凹子、黒林、富家庄を占領す。

〔12〕沙河大会戰之五圖 十月十六日、我山田少將¹⁰の混成隊は魏家楼子にて敵の包围を受け、野砲九門、山砲五門を委棄す。但、敵が我砲を分捕りしわ是が始めにして又終りなり。

〔13〕沙河大会戰之六圖 其時の露軍の後方、奉天附近の混乱。連日敗戦に敵の後方わ此の如し。

〔14〕沙河方面 明治廿七年十一月より彼我共に対陣す。対陣中、所々に小戦有れど録すほどの事なし。彼我对陣の（キヨリ）カンカク）わ遠きわ千メートル、近きわ三百メートルにて近かき所わ肉眼にて敵の行動好く見ゆ。狼奔を百メートルの間の近かき所より敵の陣を見たる所にして、防禦工事なしつ、有る敵兵が我玉を喰らつてたをれんとする所。

將士共に防寒服を着す。

〔15〕滿州の冬期わ極寒令下¹¹二十度前後の寒気なれば、兵士わ皆防寒服を着し、頭にわ金巾を巻き其の上より帽子を冠り其他毛皮の耳あて、鼻あて、防寒目鏡、毛皮の手袋、防寒靴はき、鉄砲、軍刀等金属の物わ木綿にて巻き（但金の儘にて持てば手がこごり付て取れぬ故）占領地帯を守備す。滿州寒氣の万物凡そいて又わこをり、

酒、肉等に至るまで凍り酒の水を縄にてしばりて
持ちはこび、たたき割て火にかけてとかして吞む
成り。

冬営中の屯居所 兵士わ土を握り其の土を掘たる
周囲につみ上げ、こをりよきびのわらを家根とし
其中にて穴づまいす。【画像11】 【画像12】

〈16〉明治廿八年戦中迎新年 司令部の新年祝、陣中の
餅搗き、兵士の炭焼、高き木の上の展望哨、冬営
陣中の軍人の芝居。此の芝居小屋わ地を掘り周囲
につみ上げたる六十坪余なり。

戦地における兵士たちの娯楽のため設置された芝居小屋のこ
はメディアでも報道されていた。明治三十八年一月二七日の『東
京朝日新聞』朝刊に掲載された記事「戦地の初芝居（満洲座と
陣中倶楽部）」では、「旅団司令部の前に出来た小屋は満洲座
と称し、一月二日初興行を開場。各隊の兵士は初日を待兼ねて
居たが、扱一日となると明日を知らぬ軍人の身で此芝居を見る
がしたら又何時見られるか知れぬと云ふので我隊から二十町余
りの距離を只一息に駆け付け見ると非常の大入で忽ち客止めとな

「日露戦争画帖」——個人が描いた同時代の日露戦争史——（長谷川）



画像12：『征露図会』第19編（東陽堂、明治38年2月1日）に掲載された「満洲軍の防寒服」。本図は「日露戦争画帖」と全く同じではないが、こうした図が他の媒体にも掲載されており参考にしたのであろう。



画像11：戦場の防寒具を描いた絵。防寒ゴーグルも用いられていたことが分かる。

つた」と盛況であった様子が描写されている。また、同記事にはもう一つの陣中芝居小屋である「陣中倶楽部」に関して「沙河方面の某宿営地前面の畑中に新設されたといふと体裁宜いが、其構造は間口六間、奥行十間、深さ四尺の大穴を掘、其土を周囲に積んで土手となし穴の中央に数本の柱を建て、屋根を高梁の程で葺いた穴芝居とも云ふべきものだ」と説明されており、「日露戦争画帖」の記載と一致する。落語や講談など多彩な演目で大入りだった様子が記されている。

〔17〕是頃露本国聖彼得堡市に於て大動乱起る。コサツク兵と労働者の戦い。【画像13】

これは一九〇五年一月九日にロシアの首都であるサンクトペテルブルクで発生した血の日曜日事件を描いたものである。貧困や搾取に苦しむ労働者による平和的な請願に対して軍隊が発砲して多くの死傷者が発生、第一次ロシア革命の導火線となった。日本国内でも事件は海外からの電報を転載する形で早々に報じられている(例えば「騒擾益々激烈」「読売新聞」明治三十八年一月二十四日朝刊では、労働者の大示威運動が軍隊により妨げられ一斉射撃で多くの死傷者を生じ、指揮者であるガボンが死去したと報じられている)¹¹⁾。「日露戦争画帖」では剣を持った労働者が兵士と戦う様子が描かれており、事実とは異なっている。想像で描いたものであろう。

〔18〕旅順包囲軍(第三軍)

司令官陸軍大将乃木希典、第一師団長 東京 中将松村務本、第七師団長 北海道 中将大迫尚道、第九師団
長 金沢 中将大島久直、第十一師団長 四国 中将土屋光春、外二第四師団後備兵
敵守将 関東半島司令官 陸軍中将ステツセル



画像 13：サンクトペテルブルクにおける血の日曜日事件を描いている。想像図であるため衣服などは実際のものとは異なるが、交戦国における大事件であり、画帖に取り入れられた。

記事 遼東半島の一角、旅順口港わ実に黄金山と老鉄山に海を抱き、其背面にわ大小の山々墨々にして起伏し天然の良軍港に加えて、敵が東洋に於ける海軍の根きよ地とせんが為要害堅固なる砲台を築造し、鉄條網に電線等を引廻し防禦に十分策を巡し守兵わ之れによつて、あくまで死守せんと力めたる要塞に我軍わ弾雨の下、奮闘力戦、地下に穴を穿ちて進み、又地に這いて進み、肉弾⁽¹²⁾血河を作り、全世界歴史に未だ無き激戦行ふ。旅順口港要塞戦成り。

〈19〉 旅順口港附近地図

〈20〉 明治廿七年五月卅日 旅順包圍軍 安子山より台子山に互る線を占領す。

海上より見たる旅順口港。向て右わ黄金山。其の下わ抵砲台、中央の山わ白玉山、左わ老鉄山なり。

〈21〉 廿七年六月廿三日、敵艦隊全部に旅順港外に出で我軍艦之れを圧迫し水雷を放ちて襲撃す。廿七年六月十三日、水雷敷設船台北丸、旅順港外にて作業中水雷爆破す。

〈22〉 明治廿七年六月廿四日、旅順包圍軍、釵山を占領す。同日、旅順背面歪頭山を占領す。同日、旅順背面の一角、小平島を占領す。同年七月廿六日、旅順攻圍軍、營城子及び大白山附近を占領す。同七月廿八日、長嶺子、英各石の線を占領す。同七月卅日、土城子南方高地一帶より大孤山東高地に互る線を占領し、敵を要塞内に圧迫す。之れより敵わ旅順口本防禦たる砲壘に立こもり死山血河の猛戦と成るなり。

〈23〉 明治廿七年八月十六日、我旅順攻圍軍わ軍使山岡熊吉少佐をして敵軍に送り、旅順内に居る非戦闘員救助の聖旨を伝へ、又敵に勸降書を致す。敵わ我聖旨にを^マせず尙勸降書にも^マひたがわらず、あくまで防戦をせんとせり。

〈24〉 敵砲台わ地中に穴を掘り其中に大砲をすゑ、其の穴の側面に大砲の先きを出し、又大砲のすゑたる穴の上

より厚さ四分乃至五分の鉄板をのせ其の上より土二三匹ほどの厚さに置き、遠近より大砲の有るを少しも見ぬ様に造り、尚其の前にざんぼう^マを掘り鉄條網、電流線を張りまわせり。

〔25〕明治廿七年九月二十日、旅順攻囲軍わクロバトキン砲台を占領し、敵の水源地を奪ひ水道を断つ。

〔26〕明治廿七年十月廿日、旅順攻囲軍わ松樹山及び二龍山、東鷄冠山北砲台の外岸及びP砲台を占領す。十一月三日、P砲台わ一戸少将¹³の軍が占領せし故、一戸砲台と命名す。

敵砲台を撃ち砕く二十八糶榴弾砲。【画像14】

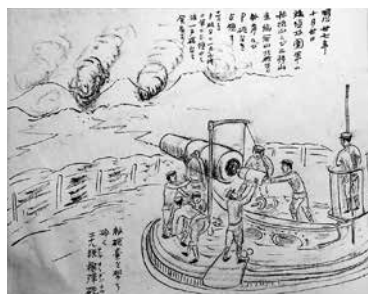
〔27〕我海軍わ陸戦隊を組織し、重砲を旅順背面一山山頂に引上げ敵砲台を砲撃す。

〔28〕我海軍陸戦隊が重砲を以て旅順港口に間接射撃を行い廿七年十月廿一日、旅順港内の汽船二隻を撃沈す。十一月六日、旅順旧市街武器庫及び松樹山旧砲台火薬庫を爆発せしむ。十一月十九日、機器局附近の火薬庫を爆発せしむ。十一月廿二日、機器局附近に大火災を起こさしむ。

〔29〕明治廿七年十一月廿七日、旅順口港包囲軍総攻撃を行ふ。時に中村少将司令官¹⁴となる。白礮決死隊を組織し、其数数千名、皆上着をぬぎ白しやつに白礮をかけ決死の勇を以て敵陣に突撃なす。今や進撃に際し乃木大将之れを見送る。

〔30〕白礮決死隊の奮戦。敵陣に肉弾を以て力闘し実に全員の凡ソ八分の死傷を出す。中村少将も戦傷す。

〔30〕我旅順攻囲軍の電光形攻道。敵わ高所の砲台より我軍の進撃を好く見張り一撃に釣瓶打ちにされ、為めに我軍



画像 14：旅順攻囲戦で威力を発揮した 28 サンチ砲。

ノ死傷甚だ多く出す。故に我軍の考案せし進撃の道にして、敵より我兵の見へぬ又一直線に打たれぬ様に掘りたる則ち電光形攻道なり。掘り削りたる土のくずれぬ様、支那米の空袋に砂又わ土を入れ其れを左右両側に積み重ね木杭を打ちてささゑたる物なり。

〔31〕明治廿七年十一月三十日、旅順攻囲軍わ旅順背面の最高所、二百三高地を攻撃す。二百三高地わ旅順背面中の最高地なれば、敵も之れを占領せられたれば旅順口港内を一望の元に見下され、敵の打撃甚だしく、則ち敵の死活の運命に成るなれば敵も全力を尽して防禦に務め我軍も又奮戦攻撃なせり。我第七師団の増援兵が爆裂弾をせをい二百三高地に進撃す。

〔32〕敵が死力を尽して防戦すれば、我軍又決死肉弾を以て攻撃し遂に我軍の占領なすや、敵も前より用意のぬけ穴より逆襲し来り又もや大激戦を成す。之の如き敵の逆襲、たがいの決死の戦い三度に及び我軍も多大の努力をもつて確実に我軍の占領する事と成れり。之十一月廿日も早暮れんとする頃なれり。占領後、二百三高地を鉄血山と名づけたり。又我軍わ之れに観測所を置き旅順口の砲撃に多大の便を得、為めに旅順の全占領を早めたり。

当時流行せし二百三高地髷【画像15】

二〇三高地の攻略は日露戦争の全期間を通じて、戦局全体に大きな影響を与えた出来事の一つである。遼東半島先端部に位置する旅順では日露戦争前から近代的な要塞の建設が行われ、また旅順港はロシア太平洋艦隊（旅順艦隊）の根拠地となっていた。ロシアはウラジオストク艦隊と旅順艦隊、そしてバルチック艦隊の三艦隊を有しており、聯合艦隊はこれらが合流する前に



画像 15：203 高地髷のイラストも描き込まれている。

各個撃破することを目指した。しかし、旅順艦隊は海戦を避けて港の奥深くに逼塞し、日本海軍は三度にわたる閉塞作戦で閉じ込めを図るが失敗に終わった。そこで、陸軍との共同作戦によって旅順要塞を攻略し陸上からの砲撃で艦隊を殲滅する方針へ転換した。そのため乃木希典率いる第二軍が編成され、膨大な死傷者を出しながら攻囲戦を行った。二〇三高地の攻略によって港内の観測が可能となり艦隊は殲滅され、明治三八年一月一日に要塞が陥落した。二〇三高地の名称は標高に由来する。陥落直後に松村務本中將によって鉄血山と名付けられたが、後に乃木希典が詠んだ七言絶句から「爾靈山」(にれいさん)二〇三(三)の名が定着した。二〇三高地髭は髭(束髭)を高く立てた女性の髪形の一形式で、旅順最高地である二〇三高地の陥落に合わせて名付けられ全国で流行した。⁽¹⁶⁾「日露戦争画帖」の作者は、戦場の様子だけでなく、国内の文化・風俗をも含めた鳥瞰的な視点で本資料を描いていることが分かる。

〔33〕明治廿七年十二月二日、旅順攻囲軍左翼方面に於て彼我軍使相会し午前十時より午後四時まで休戦を成したがいに死傷者を収容す。同じく十二月六日、彼我軍使相会し五時間休戦を成し相互の死傷者を収容す。右よつて攻囲軍の如何に苦戦成るか、如何に死傷者の多きかを知るべし。⁽¹⁷⁾

敵旅順の参謀長コンドラテンコ中將、我砲弾にて陣中に戦死す。中將わ旅順守備隊中の智將にして為めに我軍ノ困難非常成りしが戦死するに及び旅順の開城を早めたり。

〔34〕明治廿八年一月一日、我軍旅順口全占領す。海わ開戦初頭より、陸わ明治廿七年五月廿六日金洲南山占領より幾多の奮戦撃戦を重ね数万の死傷者を出し、国民も又其占領を一日も早からん事を願い待ち居し旅順口も遂に明治廿八年一月一日、敵の参謀長陸軍大佐ライス、同海軍大佐セスノウイツテ我軍に来て降を求めり。之れ実に海軍わ陸の金洲南山占領と同日東郷大將が遼東半島南部沿岸封鎖宣言より八ヶ月めなり。

〔35〕明治廿八年壹月五日、我乃木大將と敵旅順の守将ステツセル將軍と旅順口背面水師營にて会見す。附記 当時用いられたる机わ後日陸軍軍医学校に蔵し有り。【画像16】

〔36〕 敵の降虜、我軍の命により旅順口港西方鴨湖村に集る。

〔37〕〔39〕 旅順口港開城に於ける事項

敵わ明治卅八年一月一日降伏し、同月二日水師營に於て我参謀長陸軍少将伊地知幸介、参謀官陸軍中佐岩村団次郎と敵使参謀官陸軍大佐ライス、参謀官海軍大佐セスノウイツと会議し、占領に付ての條書に彼我調印す。時の降虜及び戦利品左の如し。〔中略〕捕虜中、将校にして戦鬪に参加せざるを宣誓したる者わ各従卒名つゞを附し本国へ放還し、同時に非戦鬪員にも帰国を許したり。〔中略〕本國放還せし者の外わ我内地に送り、浜寺、天下茶屋、習志野、伏見、名古屋等に收容せり。

捕虜收容所 監守兵の目をしのびとばくをなす者 監守兵のすきをねらい外側板囲の下より酒又わビールを売る内地人 〔画像 17〕

日露戦争の捕虜は約七万二千人に及び、全国で二九か所に捕虜收容所が置かれた。国際法に基づき捕虜は丁重に扱われ、日本正教会による慰問が行われたほか、監視付きで外出することもでき、收容所で死去した捕虜たちはロシア式の儀礼によって埋葬された。⁽¹⁸⁾

「日露戦争画帖」——個人が描いた同時代の日露戦争史——(長谷川)



画像 17：捕虜收容所の様子は新聞記事など文字から得た情報による想像図であろうか。捕虜相手に商売する日本人がいたことなども分かり興味深い。



画像 16：水師營の会見における乃木とステッセルの姿は日露戦争の勝利を象徴する画像の1つ。

「日露戦争画帖」下巻

- 〔1〕 御製 こらは皆 いくさのにはに出てはて、 翁やひとり 山田もるらん
- 〔2〕 明治廿八年一月二十五日、敵わ黒溝台が我全線中、最も手薄なるを知り夜に乘じ大挙来襲し我陣地に肉薄し我軍此に防戦務めしが、始めより手薄の軍隊なれば甚だ戦い不利に成り勝敗のほども気づかわるる時、我第四師団の工兵第四大隊わ必死の勇を出し爆裂弾を敵に向て一挙になげ付たり。此れにて敵わたちまち敗走し、我軍勝利を得。此時大山総司令官工兵第四大隊に感状を賜ふ。
- 〔3〕 明治三十八年三月初旬 奉天附近大戦地図 奉天戦の第一図 奉天わ満洲第一の首都にして敵最も防備せし所なり。
- 〔4〕 奉天戦の第二図 奉天附近大戦 我軍左翼縦隊の内、右翼隊に於ける戦争実況見取図
- 〔5〕 奉天戦第三図 図中A B C D Eわ皆敵砲兵陣地なり
- 〔6〕 奉天附近大戦第四図 万宝山の敵兵攻撃。山の頂き右方キザキザわ我砲弾にて山形の変ぜし所。又山麓の垣きわ敵の鉄條網なり。其の左方重り有るわ布袋に砂を入れたる(ドノヲ)にて防禦なし有る所なり。
- 〔7〕 奉天附近大戦第五図 本図わ従軍者の実戦スケッチ画なり。渾河水上某部隊の渡渉 渾河右岸の激戦 ラツパ台攻撃際し後方に去る我負傷兵
- 〔8〕 奉天附近大戦第六図 強大に防戦抵抗せし敵も我軍の奮戦にたえず総退却を始め我全軍追撃す。
- 〔9〕 奉天附近大戦の第七図 我軍奉天を包囲攻撃し敵わ只一方の退路、鉄道線路と人道路の間を数十万の敵兵が群がり逃ぐるを我軍わ全力を注ぎ両方より猛射す。敵の死傷甚だ多大成り。
- 〔10〕 奉天附近大戦第八図 明治廿八年三月十日午前十時、奉天占領。同月十五日我軍司令部奉天入城式 三月十五

日【画像18】

満洲軍総司令官の大山巖を先頭にして日本軍が奉天へ入城する場面は日露戦争の勝利を象徴する画像の一つである。明治神宮外苑の聖徳記念絵画館には鹿子木孟郎筆「日露役奉天戦」があり、また日露戦争二十五周年記念ポスターなどでも同様の画像が用いられた。

〔11〕奉天附近大戦第九図 満洲軍総司令部（省略）

〔12〕奉天附近大戦第十図 明治廿八年三月十六日、我軍長駆

して鉄嶺を占領す。図中、人家密集せるわ鉄嶺市街にして少なき塔わ城辺に有り。火炎の所わ停車場附近。右山上に塔あるわ塔山にして敵の防禦陣地有り。山腹土まんじゆわ支那人の墓にして近かく歩兵の進軍するわ露軍の造りし軍道にして、騎兵進軍するわ奉天に通ずる街道、又遠き線わ鉄道線路、最も遠き白線わ遼河成り。

〔13〕明治廿八年三月十日奉天占領より同年九月一日休戦條約までの我軍の進軍地図

*〔13〕の裏面に聯合艦隊首脳佐世保凱旋時の写真（雑誌切り抜き）貼付。「戦勝の我海軍」と墨書あり。

〔14〕明治廿八年五月廿七日 日本海大海戦記

世界海戦史上未だ無き大海戦。敵（旅順及び浦塩艦隊わ）我か艦隊の為に大損害を受け実に戦闘力皆無と成り、露国が東洋の海上に其勢力も権力も失ひたれば、之れが海上権を得て今迄の敗戦を大拳に納めんと露本国のバルチック艦隊司令長官海軍中将ロヂェントウエンスキー、司令官同少将エンクイースリをして遠く東洋を廻航する事と成れり。其廻航の航路の航路わ五千噸以下の艦わ地中海をへてスエズ運河を通り、亜弗利



画像 18：大山巖総司令官、児玉源太郎参謀長などが描かれている。画面奥では中国人たちが日の丸を持って日本軍を歓迎している。中国人による日本軍の歓迎のシーンは当時の石版画などでもよく描かれた。

加の東岸マダカスカル島に着き、此所にて五千噸以上の大艦わ垂弗加の南端喜望峰を週り来るを待合し、共に一路東へ進み、其の印度洋まで来りし時わ明治廿八年一月一日にてバルチック艦隊が入港せんと一途に見當を附け来りし旅順口港が陥落せしかば、彼れの見當はたとはずれ此先き如何にせんと米國政府に問ければ本國より旅順陥落わ是非も無し。然れば司令官海軍少将ネボガトフをして黒海艦隊をひきい加勢に行かしむれば勇進し日本艦隊を撃滅し日本の海峡を突破し浦塩に入港すべしと命令を成し、速時黒海艦隊に出発の令を下せり。

然し黒海艦隊が如何に全速力にて進行すればとて其のバルチック艦隊に追付会するにわ半月以上の日子を要する成れば其間バルチック艦隊わ仏領東印度支那の南部柴棍サイゴとに更代にて碇泊して待合し、然して黒海艦隊の来り会するや共に充分修理を成し堂々と我軍と大決戦を行わんと支那海より日本海へと進航し来れり。

〈15〉バルチック黒海艦隊東航路図　バルチックヨリ航呈凡ソ二万五千哩

〈16〉之のバルチック及び黒海艦隊の東洋廻航わ則ち東洋（支那海、日本海を含む）の海上権を得んが為めなり。若し日本が彼れに海上権をうばわれれば、如何今迄朝鮮支那にて連戦連勝を成し居りし我陸軍に内地より彈藥兵ろの運搬等成す事を得ず、撃つに彈無く、喰ふに食無く、凡そ百万の我軍の運命や如何ならんか、諸外国も皆實際の日本の勝利わバルチック艦隊と日本艦隊との戦争の決果を見て決すと云ひ居れり。然れば我国も此の廻航こそ最も一大事成れば、為めに旅順の攻撃にも非常の努力と多大の犠牲を払い其の陥落を早めたり。又當時バルチック艦隊の來航の海路に面する我領土の一つの島、一ツの岬にも望楼と云ふ物をもをけ、甲の望楼にて艦の進航を遠見すればすぐ乙の望楼へ、乙の望楼より丙へ、丙の望楼より軍港へ、軍港より艦隊へ一時も早く戦備を成す様すべての手順をととのえ何時成りと来るを待受たり。

時わ之れ明治廿八年五月廿七日、大拳長航し来りし敵バルチック艦隊わ我対馬海峡遠くに二列縦線を為し軍

容堂々と進行し来る。此数大小合して三拾八隻。二列単縦線を為し進行し来るバルチック艦隊の図。

〔17〕

敵艦現る出航用意の命令と共に我艦隊わ威風堂々海波を蹴り進路を東北に取り、根拠地を出航す。其日波浪漸く高く水雷艇を伴ふ能はざれば水雷艇隊わ対馬に入りぬ。此時我第三戦隊わ対馬竹敷を左舷にして敵の航路を窺いたるに十一時半頃に至り敵艦わ東水道を通過しつつ有るを見、本隊に伝ふれば本隊わ進路を少し南方に転じ。午後一時頃沖の島を見る須臾にして第三戦隊に会す。則ち第一、第二戦隊わ駆逐隊を伴ふて更に進路を南方に転じ、第三戦隊と第四駆逐隊とわ少しく東に転じ彷徨する内、午後一時四十五分、敵わ旗艦を先登に二列単縦線を成し進み来る。其数頗る多く其後尾を望み見べからざるまでに列し、彼れ軍容亦堂々として進行し来るに会す。此時我旗艦三笠の艦上高かく「皇国の興廢此一戦に在り。各員一層奮励努力せよ」右の信号上り、戦闘開始す。敵我れに向て発砲すれば我れ又之れに応じ砲火を送り、砲火漸く猛烈となり此時各駆逐隊わ此本隊の右側に在り。斯くて敵艦を漸じ九州北岸に圧迫し、敵わついに全く針路を東に転じ、我れ又之れに応じて各艦の艦首を敵の北方に併行し第一戦隊わ則ち先頭三笠艦シタガリ殿と成り、春日艦先頭に在り。此時戦ひ漸く激烈となり敵艦ポロチノ型の一隻早やくも火災を起し少時にして敵の針路を西に転じ、我れは之れに応じ火災を起したる敵艦にわ第二戦隊五隻をもつて砲火を集中せり。此時よりして第一戦隊わ熾に砲火を送りて敵と併行し且つ先頭を圧するの形勢を取りて進み、第三戦隊わ敵の後方を曲りて之れを包んで接触するに至り、第二戦隊わ又やがて

〔18〕

敵の側面に併行せり。是に於て敵わ全く我軍の為に包囲され、逃走せんとする艦わ我駆逐隊則ち其前路を遮り、敵をして逸するに由なからしめたり。此包囲の状態わ距離に差有りしも翌日迄保れたり。右五月廿七日の戦争なり。

五月廿七日夜、我駆逐隊水雷艇隊わ敵艦に突進して敵艦を撃沈す。

春日艦、先頭に在りて敵艦ボロチノ型火災を起す。

- 〔19〕五月廿七日、敵艦シスベルキー、巡洋艦アドミラルナイモフ、同ウラジミルモノマフわ既に我艦に撃破されたる上、同夜我駆逐隊水雷艇隊の攻撃を受け大破し、全く戦鬪力を失い、対馬附近に漂流中、我仮装巡洋艦信濃丸、八幡丸、仙台丸、佐渡丸等此れを発見し、正に捕獲せんとせしも幾ばくも無く皆沈没し、其乗組の生存者九百十五名を助け捕虜とす。

- 〔20〕明治廿八年五月二十八日、石見国沖リヤンユールド岩附近に於て敵黒海艦隊旗艦ニコライ第一世（戦艦）、アリヨール（戦艦）、セニヤウイン（装甲海防艦）、アブラキシン（海防艦）の四隻わ我包囲攻撃にあい遂に司令官ネボガトフ少将わ四隻共白旗を出し我れに降伏す。則ち我艦隊わ敵司令官共之れを捕獲す。

- 〔21〕敵司令長官中将ロゼントウエンスキーは已座乗せし旗艦クニヤーズワロフ号わ撃沈されしかば駆逐艦ビエードウキツチに移乗、逃走なししが五月廿八日夕刻、韓国鬱陵島南方に於て我駆逐艦連に捕獲され司令長官及び少将エンクイースリと共に捕虜となる。但右両将共重傷ををい居ればただちに我病院多入院なさしめたり。我東郷大将わ其病院多見舞に行かれ、院中にて両將軍会见されたり。

- 〔22〕日本海海戦に於ける敵の損害（省略）

戦勝將軍と戦敗將軍と病院にて対面 東郷大将が敵司令長官を病院二見舞わる。

右海戦わ五月廿七日に始まり五月廿九日に終る。此五月廿七日を海軍記念日として毎年祝日とせり。

- 〔23〕明治廿八年六月十六日、満州威遠堡門に敵騎兵約三百来りしが、速時我軍撃退す。又同日、昌図にてわ我一部隊わ敵一部隊を駆逐し同地を占領す。同日、大小屯にて我一部隊わ四面城西方より進撃し来る敵騎兵を撃退

す。同日午前一時四十分頃、綿花窩柵に於て敵騎兵を突破す。

〔24〕明治廿八年七月七日、我片岡北遣艦隊わ陸軍運送船を護衛しいかく砲撃の上、陸戦隊をして樺太島コルサコフに上陸す。同七月廿五日、樺太島アレキサンドリスキーに上陸す。

〔25〕明治廿八年七月七日、樺太占領軍司令官陸軍中將原口兼齋氏のひきゆる我陸兵わ第三艦隊（司令官海軍中將片岡七郎氏）の援護の元に樺太メリカ附近に上陸しアタウイナパア村の北方高地を占領し尚を進んで攻撃すれば、敵わ其日の午後二時頃コルサコフの陣地を焼棄し逃走す。よつて我軍わ七月八日早朝、コルサコフを占領す。

〔26〕此戦闘により海軍大尉以下捕虜八千名、戦利品野砲四門、機関砲一門等有り。七月十一日我軍わダーチネ附近の敵を圧迫し午後二時より同村西方林中の陣地の敵を砲撃す。敵も中中頑強にして十二日まで撃戦をつゞけ以て之れ占領す。

明治廿八年七月二十五日、我樺太占領軍わ第一アルコワを占領し、次ぎに第二アルコワ及びニコライスクを占領し、進んで樺太の首府たるアレキサンドロフスキーを占領す。

〔27〕徳川時代、単身樺太に渡り同地わ天長地久大日本領成りと土人に占めせし近藤重蔵。故に我軍の占領と同時に右重蔵を地名の内に加ゑたり。¹⁹⁾

徳川時代、樺太に渡航し樺太（露名サガレン島）と西比利亞東部の間なるダツタン海峡を日本領成りとして測定せし間宮林蔵。我軍の樺太占領と同時にダツタン海峡を間宮海峡と改めたり。【画像19】

〔28〕露名サガレン島、日本名樺太島わ我軍の占領と同時に古今同島にて功名者の名を用い地名を改正せり。〔一部省略〕

〔29〕 明治廿八年六月十日、米國大統領ローズウエルト氏が我國と

露國との中間に於て忠告的尽力により露國皇帝より我國に向
ひ媾和を申來る。我國之れに応じ則ち談判全權委員に外務大

臣男爵小村寿太郎、在米公使高平小五郎、右両氏に命ず。又
露國全權委員わセルジウキツテ、元日本在露國公使男爵ロ

ゼン、右両氏なり。然して談判地わ北米合衆國（ポーツマウ
ス）なり。【画像20】 【画像21】

〔30〕 明治廿八年八月八日午前十一時、我全權委員わ談判地ポーツ
マウスニ着し米國歩兵一個大隊に保護され軍裁判所にて歓迎



画像 20：セオドア・ローズヴェルトによる日露の仲介の様子。ロシア兵のセリフとして「露助云ふ 毎々の敗戦で日本に顔を会すのは面目ない」と書かれ、ローズヴェルトは「今更云ふても仕方がない」と答えている。



画像 21：画像 20 は北沢楽天による風刺画を明らかに参照して描かれたものであるが、全く同じものではなく、作者による改変がなされている（北沢楽天『楽天全集 5 世界外交戦争漫画集』アトリエ社、昭和5年 所収）。

*本画集は楽天の過去の作品を1冊にまとめており、日露講和の風刺画は同時代に描かれたもの



画像 19：近藤重蔵と間宮林蔵の絵も挿入され、作者が歴史や文化に関心を寄せていたことがうかがわれる。アイヌと思しき樺太の住民の姿も特徴をよくとらえている。

を受け直にポーツマウスエントツホテルに赴けり。

〔31〕明治廿八年九月一日、ポーツマウスに於て両国全権委員互に各相互の休戦條約を成す。〔休戦條約書の本文省略〕備孝^{マツ} 千九百五年わ我明治廿八年にして月日わ同じなり。右休戦條約わ交戦国両国皇帝より御批准の交換有るまで有効とす（批准は承知のゆ^{マツ}みなり）。

〔32〕ポーツマウス談判の光景〔画像22〕

〔33〕ポーツマウス談判の成行 我國之要求せし箇條〔省略〕

談判にて約定成りし箇條〔省略〕

〔34〕談判にて約定成りし箇條の続き〔省略〕

〔35〕明治廿八年九月五日、東京日比谷公園に於て非媾和国民大会をなす。警察わ其れを留めんと公園の入口に木柵を成し多くの警官之れを守り居リシガ勇勢成る人民わ木柵を破りて乱入し大会を成す。〔画像23〕

〔36〕明治廿八年九月五日、日比谷公園に於ける国民大会

熱誠なる国民わ警察官の禁止に頓着せず雲霞の如く鮮集して警官と争闘し、ここに一大修羅場を現出して遂に構内より駆逐し午後に至り一発の号砲を合図に目的の国民大会を實行し、左の決議を

「日露戦争画帖」―個人が描いた同時代の日露戦争史―（長谷川）



画像 23：日比谷事件の場面では喪章を巻いた人物の姿も描かれる。日比谷公園のガス燈のデザインなども正確に再現されている。



画像 22：ポーツマスにおける会談の場面も詳細に描写されている。当時、現地の様子を報じる媒体が存在したことを示す。

為せり。

決議 吾人わ拳国一致、必ず屈辱條約を破棄せん事を期す。吾人わ我が出征軍が驀然奮進以て敵国を粉碎せん事を熱望す。明治卅八年九月五日 於日比谷 国民大会 各地に於ける国民大会之決議文も大体右と大差なし。

〔37〕 九月五日、日比谷の大会よりくり出したる幾万の民衆わ肅くとして二重橋前に至り君が代を合唱し、又警官と衝突し内務大臣官舎を大多数の群衆にて焼討す。警官抜劍し之れを制せんとし、かゝつて大混乱を來たす。同日、大群衆わ官の御用紙たる国民新聞社を襲撃し之れを破壊す。又同日演説会場たる新富座も大群衆にて瓦石兩と飛び大混乱を演ず。

〔38〕 九月五日より七日まで多数の民衆わ東京市内各警察署、分署、派出所等を破壊又わ焼打す。かくて民衆わ暴動と成り遂いに警察の力にてわ如何ともなすを得ず。故に九月五日より佐久間衛戍総督をして東京市内に戒嚴令を布き要所々に兵士を以て張書をなし此の動亂をしずめんとせり。新聞わ發行停止さる物多数有り。地方わ大阪、京都、神戸、横浜、名古屋其他津々浦々に至るまで非講和国民大会を開き大いに氣勢を上げ、扱てわ動亂の起りし所も数多有り。奈良市も尾花座に於て国民大会をなす。²⁰ 聴衆充満シ無事に終レリ。

〔39〕 我軍隊之本国を引^ッ凱旋

〔40〕 東郷大将の東京を凱旋 同乗右側わ參謀長加藤友三郎少将なり。他の陸海軍大将の凱旋も同様なり。【画像

24】【画像25】

〔41〕 国の為め ささげし命 ながらえて きよ我さとに 錦かざりて 帰るうれしき

〔42〕 日露の開戦より兵士わ銃砲劍刀に^ッ手を、我れは筆を手に占領^ク万歳の声に勇みつ運びし拙なき、ぬたくり書

き、基より画として見るねぶちなし。只戦争当時の記念にも成れば幸甚なり。
明治廿八年 軍隊の凱旋を迎えて



画像 24：聯合艦隊司令長官の東郷平八郎が凱旋した場面。東京の新橋付近を通過する場面を描いた石版画によく似た構図のものが存在する。



画像 25：明治 38 年 11 月 7 日に印刷された大判の石版画「聯合艦隊之凱旋東郷大将新橋着之光景」

〔註〕

(1) 参考にしたと考えられる資料は、各種の新聞に掲載された挿絵・写真の他、博文館が発行した『日露戦争実記』、春陽堂が発行した『風俗画報』臨時増刊『日露戦争図会』・『日ポン地』など多岐にわたる。なお、日露戦争期の図像を多数集めたものとして、『日清・日露戦争とメディア』（川崎市民ミュージアム企画展図録 平成二六年）がある。

(2) 宮内省蔵版『明治天皇御集全』（岩波書店、昭和二三年）九一ページ。

(3) 真下飛泉『学校及家庭用言文一致叙事唱歌 第一篇出征』（五車楼、明治三八年）。

(4) 事件は青森県津軽郡釧舟崎沖で発生。

(5) 戦艦ペトロパヴロフスク（Петропавловск）を指す。

(6) 井口五郎編『明治廿年十一月駿河甲斐地方參謀旅行記事 東軍之部』（明治二〇年）にはある地点における障害物構築について「此地ハ鹿柴ヲ設クルコト六ヶ敷故鉄條網ヲ設クヘシ」（一四ページ）などの記述がある。

(7) 狼狽とは、底に鋭利な木杭などを埋設した落とし穴のこと。いわゆるプービートラップ。

(8) 野津道貫が司令官を務める第四軍のこと。

(9) 丸井政亜（嘉永四年～昭和九年）。紀伊国出身、陸軍に入り日清戦争、日露戦争に出征。

(10) 山田保永（嘉永三年～昭和七年）。紀伊国出身、陸軍に入り西南戦争、日清戦争、日露戦争に出征し沙河会戦で部隊を指揮し、樺太守備隊司令官などを務めた。

(11) 実際にはガボンはこの事件では死亡しておらず、スイスのジュネーブに亡命して革命活動を継続し、翌年にロシアへ戻ったところを暗殺された。

- (12) 「肉弾」という言葉は、明治三十九年（一九〇六）に、軍人作家として知られる櫻井忠温が旅順戦の実体験に基づいて出版した小説『肉弾』（英文新誌社）によって一般に広まった。ただし、日露戦争中の明治三十八年四月一〇日の新聞記事「禁衛兵団戦状 宛然たる要塞戦」（『東京朝日新聞』朝刊）で「…銃丸に次ぐに肉弾を以てするに非ざれば容易に奪取攻陥すること能はざるなり」などと使用されている事例があり、戦争中から使われていたことが分かる。
- (13) 一戸兵衛（安政二年～昭和六年）。弘前藩出身、陸兵学寮に入り西南戦争、日清戦争、日露戦争に出征。日露戦争では旅順攻囲戦で部隊を指揮した。第一七師団長、第四師団長、教育総監などを歴任し、後備役に入った後に学習院長や明治神宮宮司を務めた。
- (14) 中村覚（安政元年～大正一四年）。彦根藩出身、陸軍教導団に入り西南戦争、日清戦争、日露戦争に出征。日露戦争では旅順攻囲戦の白樺隊を指揮した。東京衛戍総督、関東都督などを歴任。
- (15) 「二百三高地を観る」（『東京朝日新聞』明治三十七年二月一九日朝刊）。
- (16) 江馬務『日本結髪全史』（立命館出版部、昭和十一年）三四〇ページ。
- (17) 両軍の一次的休戦と死傷者収容の様子は『風俗画報』臨時増刊『日露戦争図会』一八編（春陽堂、明治三十八年）に掲載された「砲台上に於いて彼我将校会见談話の図」に材を取ったと考えられる。
- (18) 村田仁「日露戦争期におけるロシア軍捕虜への待遇 名古屋捕虜収容所を中心に」（『皇學館史學』三七号、令和四年）。
- (19) 重蔵岬（シレットコ・アニワ）に近藤重蔵の名前が採用された。樺太の地名については、鈴木仁「樺太領有初期の地名変遷小史 地名になった近藤重蔵と消されたアイヌ語地名」（『北海道史研究協議会会報』九五号、平成二六年）。

(20) 奈良市奈良町にあった芝居小屋（後に映画館）の尾花座は明治四二年竣功であるため、同名の施設が存在したと考えられる。また、この部分では、全編を通して唯一、具体的地名として奈良市のことを記載していることから「日露戦争画帖」の作者は奈良市在住であった可能性を指摘できよう。

◆翻刻にあたり、田浦雅徳先生のご教示を得ました。記してお礼申し上げます。

KŌGAKKAN SHIGAKU

No.38 March 2023

Articles

- Research on the Battle of Hakata Bay during the Bun'ei War TADA Jitsudō (1)
- The Buddhist Priest Rennyō and Hakusan Hongū Shrine :
Focusing on the 1474 (Bunmei 6) Rebellion in Kaga Province SHIN'YA Ryūki (15)

Research Notes

- The First Year of Shōka (1257) in the *Kamakura Ōnikki* TAMIYA Yūji (35)

Lecture Transcript

- The Joseon Dynasty and Medicinal Plants TSUJI Yamato (55)

Introduction to Historical Materials

- The "Russo-Japanese War Picture Album":
One Individual's Contemporary History of the Russo-Japanese War
HASEGAWA Rei (73)
- Kagawa Shihoko's Diary of Her Tour of Europe, Part II :
April 1 to May 22, 1887 (Meiji 20) UMEDA Yūho (107)

Miscellanea

Published
by
Historical Society of Kōgakkan University
Ise City
Mie, Japan